

2. ボランティア活動活性化のための活動の展開方策や支援策について

本報告書では全国の32のボランティア活動の受け入れ団体（ボランティア団体やNPO）に対する事例調査を行い（「第3部事例集」参照）、団体がボランティア活動を立ち上げ、活性化していくための課題とそれへの対応策を、以下の表に整理した。

< ボランティア活動活性化のための課題とその対応策の整理 >

段階	課題	対応策の例
始め る 活 動 を	活動プログラムづくりを行う	地域のニーズを把握してボランティア活動に結びつける 他の地域で行われているボランティア活動を導入する 自分達のスキルをボランティア活動に結びつける
	活動メンバーを確保する	ボランティア養成講座修了者がメンバーとなっている 行政等の広報誌を活用してボランティアを募集する
活 動 を 軌 道 に 乗 せ る 継 続 す る	メンバーが生き生きと活動する	メンバーの参加意欲や責任感を引き出す 新しいメンバーを受け入れる
	活動のためのスキルを維持向上する（活動の専門性を高める）	内部研修会や勉強会を開催する 同じ活動分野の団体と情報交換を行う 外部研修を活用する 学識経験者や実務家等の専門家に協力してもらう
	活動拠点や活動場所を確保する	低廉な価格あるいは無償で活動拠点を提供してもらう 公共施設を活用する
	活動のマンネリ化を防ぐ	リーダーの交代をスムーズに進める 活動にメリハリをつける 活動の評価を行う 新しいアイデアを活動に活かす 重点を置く活動を変える
	組織体制を整える	組織内の役割分担を明確にする
	活動資金や運営資金を確保する	自主財源づくりを行う 資金支援に関する情報を把握する 行政や支援機関から資金支援を受ける 資金源を多様化する
	社会的な理解や信用を得る	イベントを活用して知名度をあげる インターネットや機関誌等を活用して情報発信を行う ワークショップ・講演会・説明会等を開催する 実習生等を受け入れる 外部評価を得る
活 動 を 展 開 さ せ る	現在の活動の規模を拡大する	地域の多様な主体と連携し、活動をまちづくり活動へと発展させる
	新しい活動の方向性を探す	活動対象者のニーズに沿った活動になっているかを検証する ボランティア同士の交流の中からアイデアをもらう 新しいメンバーを受け入れ、活動へのアイデアをもらう 現在の活動を一歩進めてみる
	法人格を取得する	法人設立に関するノウハウの支援を受ける

2.1 「ボランティア活動を始める」段階の課題とその対応策

ボランティア活動を始めるには、活動プログラムづくりを行い、一緒に活動するメンバーを確保する必要がある。このため、事例では、以下のような様々な工夫がなされていた。

< ボランティア活動を始めるための課題とその対応策の例 >

主な課題		対応策の例	ボランティア団体
活動プログラムづくりを行う	地域のニーズを把握して、ボランティア活動に結びつける	ボランティア活動の対象者と十分なコミュニケーション をとってニーズを把握し、ボランティア活動で対応できることを探す	福祉ガイドマップおかやまをつくる会 キッズエナジー
		公的サービスがカバーしていない 人々の不安や困りごと等に目を向け、それに対応するボランティア活動を立ち上げる	NPO 子どもネットワークセンター天気村 国際ボランティアセンター山形 キッズエナジー びーのびーの
		海外等の遠隔地での活動には、現地のニーズを把握するため 地元のカウンターパート を確保する	日本フィリピンボランティア協会
	他の地域で行われているボランティア活動を導入する	他地域で実施されている 先駆的な取り組み を勉強し、自分達の地域でボランティア活動として開始した	い〜ね！おおあさ インターネットつなぎ隊 子どもの美術教育をサポートする会
		活動を地元で行う必要性について理解してもらうため、地域住民等に 意識啓発活動 を行った	い〜ね！おおあさ 子どもの美術教育をサポートする会
	自分達のスキルをボランティア活動に結びつける	地域に協力者・支援者を得て、地域活性化の一環として活動を実現させた	とおの昔話語り部いろり火の会
		営利企業に勤めていた 経験やノウハウ を社会に還元する	JSK
		活動をPRして利用者を開拓し、自分達のスキルをボランティア活動で実践した	松江おもちゃの病院
	一緒に活動するメンバーを確保する	ボランティア 養成講座の修了生 が活動メンバーとなっている	とおの昔話語り部いろり火の会 松江おもちゃの病院 かめまっ子育成委員会 子育て支援グループ「おたすけママ」
行政の広報誌 等を活用してボランティア募集を行った		松江おもちゃの病院	
地域の技術者が参加する メーリングリスト で参加の呼びかけを行った		インターネットつなぎ隊	
自分達で養成講座を開催し、活動に必要なボランティア等の 人材を育成 しながら活動を立ち上げた		国際ボランティアセンター山形	

【支援の方向性】

活動プログラムづくり

活動プログラムづくりにおいては、始めようとしているボランティア活動が地域に必要なものかどうかの観点が重要であり、事例の多くでは、活動の前提となる地域のニーズを十分に把握する努力や、自分達の活動の意義を住民に理解してもらうための努力がなされている。支援センター等の支援機関としては、地域ニーズを把握する方法等について相談にのったり、同様の分野で活躍しているボランティア団体を紹介したり、あるいは、その分野の専門家のアドバイスを受ける調整をしたりなどの支援が考えられよう。

メンバーの確保

一緒に活動するメンバーの確保にあたっては、支援機関が有する情報発信のチャンネル(機関誌、ホームページ、ボランティア団体とのネットワークなど)を活用し、メンバー募集の支援を行うことも可能である。

なお、子育て支援のサロン活動や昔話の語り部活動等のように、活動内容によっては、活動拠点が確保されないとボランティア活動を始めることができないものもある。活動拠点の確保については次項を参照されたい。

2.2 ボランティア活動を軌道に乗せる・継続させるための課題とその対応策

ボランティア活動を軌道に乗せ元気に活動を続けていくために、メンバー、活動のスキル、活動拠点、活動内容、組織体制、資金、社会的な理解や信用といった様々な面において、次表のような工夫がなされていた。

そのなかで、多くのボランティア団体で重要視されているのが、メンバーが生き生きと活動するための環境づくりや仕組みづくりであった。ボランティア活動の原動力は、ボランティア一人ひとりの自主性や主体性に基づく活動への“やる気”であり、元気に活動を継続している団体では、これをうまく引き出して活動に結び付けている。

活動のマネリ化を防ぐためにも様々な工夫がなされている。その多くは、リーダーの交代を促進したり、新しいメンバーを迎え入れるなどの、メンバーの固定化を避け、団体内部に新しい人間関係に基づくダイナミズムを生むものである。すなわち、この新しいダイナミズムによって、活動に新しい方向性が生まれていくことが期待されているのである。また、活動対象者のニーズを把握し、それに沿った活動内容になっているかを検証・評価し、その結果を活動に反映させるという好循環を意識的に作り出すことも重要である。

< ボランティア活動を軌道に乗せる・継続させるための課題とその対応策の例 >

主な課題	対応策の例	ボランティア団体
メンバーが生き生きと活動する	団体の 活動趣旨や目的を明確 にし、メンバー間でこれを共有している	ふくてっく
	活動や組織運営に関する情報を、メンバー全員で 共有化 している	遠野手話サークル「どんぐり」 みどりの会 高根ピーターパンズ ふくてっく
	ビデオ等を活用して、活動の重要性を新しいメンバーに伝えていく	日本フィリピンボランティア協会
	団体の活動や組織運営の方法等を全員で話し合っており、 メンバー全員が意思決定に 関与するようにしている	遠野手話サークル「どんぐり」 みどりの会 びーのびーの 高根ピーターパンズ
	メンバー全員が団体の代表者であるとの意識をもって行動するように、 会長を名乗る などの工夫をしている	高根ピーターパンズ
	メンバー全員に 出張での活動 の際のリーダーを務めてもらい、メンバーに責任感をもってもらうことを促している	子育て支援グループ「おたすけママ」
	団体での活動だけでなく、 地域のイベントへの参加 、学校や子ども会等へ出かけて活動するなど活動にメリハリをつけている	遠野手話サークル「どんぐり」
	“ 活動に参加すると楽しい ”と実感できるような工夫を行っている	栃本県メディアボランティア みどりの会 高根ピーターパンズ
	活動に参加することによって、 自分自身のスキルが向上 するなどのメリットを設けている	栃本県メディアボランティア
	メンバー間の交流 を大切にし、親睦を図るとともに、何も発言せずに帰る人がいないように工夫している	遠野手話サークル「どんぐり」 ふくてっく
	メーリングリストやホームページ を活用して、メンバーの疑問の解決や連絡などに活用している	栃本県メディアボランティア
	地域の子ども等の 異世代との交流 から活動を行う元気を得ている	みどりの会 高根ピーターパンズ
表彰やメディアでの紹介などの 外部評価 を得て、活動の励みとしている	佐那河内村ボランティアグループ ひまわり会 国際福祉グルメ・マイキッチン	

主な課題	対応策の例	ボランティア団体
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">メンバーが生き生きと活動する</p> <p>新しいメンバーを受け入れる・メンバーの固定化・高齢化を回避する</p>	<p>インターネットを活用してボランティア募集を行う</p>	<p>日本フィリピンボランティア協会 NPO 子どもネットワークセンター天 気村 キッズエナジー インターネットつなぎ隊 ふくてっく</p>
	<p>1日だけの体験参加を受け入れるなど、ボラン ティアが参加しやすい工夫している</p>	<p>NPO 子どもネットワークセンター天 気村</p>
	<p>ボランティア初心者向けの入門サークルを用意 している</p>	<p>国際ボランティアセンター山形</p>
	<p>新規加入希望者は、毎月の例会にゲスト参加し てもらい、団体の雰囲気や運営方針に納得した 上で入会してもらっている</p>	<p>ふくてっく</p>
	<p>団体主催のイベントを開催して、団体の活動に 関心を持ってもらう</p>	<p>国際ボランティアセンター山形 みどりの会(収穫祭を活用) ふくてっく</p>
	<p>定期活動の曜日時間帯を工夫して、より多くの 人が参加できるようにする</p>	<p>松江おもちゃの病院</p>
	<p>わかりやすい活動内容に若者受けするネーミン グを行った</p>	<p>沢内村スノーバスターズ</p>
	<p>団体自らがボランティアの人材養成講座を運営 している</p>	<p>キッズエナジー 子育て支援グループ「おたすけマ マ」</p>
	<p>学校と連携することで、子供達やその保護者と 共に活動する</p>	<p>岱明町ホテルを育てる会 ほっとはうす</p>
<p>地域外のボランティアを受け入れ、ホームペー ジ作成等の手伝いをしてもらっている</p>	<p>黒潮実感センター</p>	
<p>活動のためのスキルを維持向上する(活動の専門性を高める)</p>	<p>活動終了後に反省会をもち、活動に関する問題 点の解消やスキルに関する情報交換等を行っ ている</p>	<p>栃本県メディアボランティア</p>
	<p>研修会や勉強会を開催して、メンバーが相互に スキルアップを図っている</p>	<p>シニアネット仙台 インターネットつなぎ隊 栃本県メディアボランティア</p>
	<p>同様の活動を行っている他の団体と情報交換を 行っている</p>	<p>岱明町ホテルを育てる会</p>
	<p>より高いスキルをもっている他の団体の研修を 活用している</p>	<p>とおの昔話語り部いりり火の会 びーのびーの 浦崎ひまわり会</p>
	<p>医師、看護師、弁護士、会計士などの活動分野 の専門家に理事として協力してもらう</p>	<p>キッズエナジー びーのびーの</p>

主な課題		対応策の例	ボランティア団体
活動拠点や活動場所を確保する		活動拠点や事務所スペースを、低廉な家賃あるいは 無償 で提供してもらっている	シニアネット仙台 とおの昔話語り部いろり火の会 みどりの会 キッズエナジー びーのびーの 浦崎ひまわり会 子育て支援グループ「おたすけママ」
		公民館等の公共施設・設備を活用している	栃本県メディアボランティア NPO 子どもネットワークセンター天気村 フリースペースK 松江おもちゃの病院
活動のマンネリ化を防ぐ	リーダーの交代をスムーズに進める	代表者や役員等の中心的メンバーの選出方法、任期、再任等の ルール を設定している	栃本県メディアボランティア みどりの会 ふくてつく 子育て支援グループ「おたすけママ」
		前代表が自ら代表を退き、現在では新しい代表・副代表の 相談役 の立場で団体を支えている	子育て支援グループ「おたすけママ」
	活動にメリハリをつける	団体での活動だけでなく、地域のイベントへ参加したり、学校や子ども会等への 出前活動 を行うなど、活動にメリハリをつけている	遠野手話サークル「どんぐり」
	活動の評価を行う	団体事務局がボランティアから活動内容の報告を受け、その報告内容を分析し、今後の活動に フィードバック している	キッズエナジー
		活動対象者 の意見を優先して、ニーズに基づいた活動方法等を決めている	遠野手話サークル「どんぐり」
		活動対象者のニーズやそれに対応する 地域資源の整備状況 を勘案して、柔軟に活動内容を転換していく工夫をしている	浦崎ひまわり会
	新しいアイデアを活動に活かす	地元の子どもに活動に参加してもらい、 子どもの目 からみた新しい活動のヒントを得ている	みどりの会
		3人以上 の会員が集まれば新しい活動を始めることができる、役目が終わったり人気なくなった活動は取りやめるといった団体内ルールがある	シニアネット仙台
重点を置く活動を変える	行政等との関係構築や、メンバーの技術の習得に応じて、活動の重点を内部の勉強から、 地域の人々を巻き込んだ活動 へと変えてきている	インターネットつなぎ隊	

主な課題		対応策の例	ボランティア団体
組織体制を整える		特定の人に負担が集中しないように、また、各人が責任をもって活動に参加できるように、リーダーやメンバー間の 役割分担 を明確にしている	びーのびーの ふくてっく 黒潮実感センター
		事業部制や部会制 を採用し、団体内の役割分担を明確にしている	びーのびーの ふくてっく 子育て支援グループ「おたすけママ」
活動資金や運営資金を確保する	自主財源づくりを行う	団体の目的に沿った事業を 有料 で実施している	シニアネット仙台 国際福祉グルメマイキッチン ふくてっく NPO 子どもネットワークセンター天気村 びーのびーの
		イベント(商店街との共同イベント、独自イベント)を開催して 資金調達 を行っている	シニアネット仙台
		本来事業以外にも 収益事業 を実施している	シニアネット仙台 キッズエナジー
		活動を資金面で支える 応援団組織 をつくっている	キッズエナジー
	社会福祉協議会等から上記 資金支援に関する情報提供 を受けた		福祉ガイドマップおかやまをつくる会
	行政、基金、助成団体 等からの資金支援を受けた		シニアネット仙台 福祉ガイドマップおかやまをつくる会 ボランティアグループ佐那河内村ひまわり会 キッズエナジー 国際福祉グルメマイキッチン 田富町自然体験クラブ
	資金源を多様化する	多様な財源から バランスよく資金調達 するように工夫をしている	国際ボランティアセンター山形

主な課題		対応策の例	ボランティア団体	
社会的な理解や信用を得る	イベントを活用して知名度をあげる	団体主催 のイベントを開催している	国際ボランティアセンター山形 キッズエナジー JSK	
		地域のイベントに積極的に参加している	NPO 子どもネットワークセンター天気村 国際ボランティアセンター山形 遠野手話サークル「どんぐり」	
	インターネットや機関誌等を活用して情報発信を行う	インターネット (ホームページ、メールマガジン)を通じた情報発信を行っている	シニアネット仙台 日本フィリピンボランティア協会 国際ボランティアセンター山形 キッズエナジー インターネットつなぎ隊 赤目の里山を育てる会 びーのびーの 田富町自然体験クラブ 栃木県メディアボランティア	
		団体の 機関誌 を発行している	シニアネット仙台 日本フィリピンボランティア協会 フリースペースK 国際ボランティアセンター山形 びーのびーの	
	ワークショップ・講習会・説明会等を開催する	ワークショップ 、講習会などを開催し、活動を詳しく知ってもらう	国際ボランティアセンター山形 びーのびーの	
		環境分野など 地域住民の生活 に影響を及ぼす活動については、地域住民への十分な説明を行う	岱明町ホテルを育てる会	
	地域の学校や区役所等から 実習生 を受け入れている			国際福祉グルメ・マイキッチン
	外部評価を得る	新聞、テレビ、情報誌 等に活動状況を紹介してもらっている	シニアネット仙台 フリースペースK 国際ボランティアセンター山形	
		活動に対する 表彰 を受けた	ボランティアグループ佐那河内村ひまわり会 子どもの美術教育をサポートする会 国際福祉グルメ・マイキッチン	

【支援の方向性】

ボランティア団体が元気に活動を続けるためには、人、モノ、金、情報の全ての面において工夫が必要である。ボランティア活動の振興には、このことを念頭におきながら、一つとして同じものがないボランティア団体の各々の特徴を踏まえてオーダーメイドな支援を行うことが求められる。

メンバーが生き生きと活動するために

特に、ボランティア活動の源泉であるボランティア個人の“やる気”を引き出し、メンバーが生き生きと活動できることが重要である。

支援機関がボランティア個人の“やる気”を直接引き出すことは難しいが、ボランティア団体がメンバーにとって、楽しく、活動しがいのある場所となるように、組織体制づくりや活動の展開について相談にのったり、活動拠点に関する情報提供をしたりするなど、環境づくり面での支援を行うことは可能である。この際には、活動の評価を行う等の活動のマンネリ化を防ぐための対応策も視野に入れながら支援を行うことがポイントである。

また、ボランティア団体の中心的メンバーの相談相手となって精神的に支えたり、ボランティア募集に協力したりすることもできる。

活動資金・運営資金を確保するために

ボランティア団体は、自主財源の確保に努力しているものの、活動や組織維持に必要な資金を全て自前で用意することは難しい。このため、ボランティア団体の多くは、社会的な資金支援を必要としており、これに関する情報を探している状況にある。ボランティア団体を対象とした資金支援は、行政、基金、助成財団等の多様な支援機関が個別に実施しており、その情報を個々のボランティア団体が十分に把握することは困難である。このような情報を一元的に管理し、申請期限を考慮して、ボランティア団体に利用しやすいように提供していくことも大きな支援策であろう。

有料の事業や収益事業を行うことも、資金調達の有効な方法である。“お金を儲けることは、ボランティア団体や NPO にふさわしくない”と考える人がいるが、このような考え方にとらわれずに、団体の目的に沿った方法で収益をあげ、その収益を団体の本来の活動に活用していくようにアドバイスしていくことも重要である。

活動拠点や活動場所を確保するために

ボランティア団体が会議等に使用することができるスペースを提供したり、学校の余裕教室等の活用できる社会資源に関する情報を提供したりするなどの支援が考えられる。

場合によっては、ボランティア団体の活動が軌道に乗るまでの間、支援機関が事務所代わりとなって事務局代行を行うという支援が行われてもよいであろう。

活動上のリスクに対応するために

事例ではあまりふれられていなかったことであるが、ボランティア活動を行う上でのリスク対応への視点を、支援機関が喚起することも必要であろう。活動上の事故等のリスクを過大に想定することによってボランティア活動への意欲を削ぐことは避けるべきであるが、ボランティア活動が社会的に責任ある活動であることを自覚してもらうためにも、保険加入等のリスク対応を視野に入れてもらうようにアドバイスすることも重要である。

2.3 ボランティア活動を展開させる時の課題とその対応策

活動が軌道に乗ってくると、ボランティア団体によっては、現在行っている活動を地域ぐるみの取り組みにするなど、活動の規模を拡大する場合がある。あるいは、新しい活動の方向性を模索し始める場合もある。また、法人格を取得して、社会の一員として、より責任ある主体となって自立しようとする場合もある。このような動きは、本報告書で紹介した事例にもみられ、当該ボランティア団体では、以下のような対応を行っていた。

< ボランティア活動を展開させるための課題とその対応策の例 >

主な課題	対応策の例	ボランティア団体
現在の活動の規模を拡大する(現在の活動を地域全体の活動、あるいは、まちづくり活動へと発展させる)	行政、学校、地域住民等地域の 多様な主体と連携 して活動を実施している	い〜ね！おおあさ
新しい活動の方向性を探す	活動対象者のニーズに沿った活動内容となっているかを 検証・評価 し、その結果を活動にフィードバックしている	キッズエナジー 遠野手話サークル「どんぐり」 浦崎ひまわり会
	ボランティアが気軽に立ち寄れる場所を活動拠点の一角につくり、 ボランティア同士の交流 の中から新しい活動のアイデアが出てくることを期待している	NPO子どもネットワークセンター 天気村
	子ども等 異世代の新しいメンバー を受け入れ、活動へのアイデアをもらっている	みどりの会
	現在の活動を一步進めてみる(配食サービスで利用者宅を訪問する際に 一人暮らし高齢者 の安否確認をするなど)	国際福祉グルメ・マイキッチン
	活動対象地域の規模を見直して、より小さな活動地域を設定し、その地域のニーズに沿った活動内容にしていく	ふくてつく
法人格を取得する	地域の支援機関 から法人設立に必要な書類作成や会計処理のノウハウ等についてアドバイスを受けた	NPO子どもネットワークセンター 天気村

【支援の方向性】

現在行っているボランティア活動を地域ぐるみの取り組みにする場合には、地域の多様な主体から理解と協力を得て、協働体制を築いていく作業が必要となる。支援機関は、自らのネットワークを活用して、このプロセスを支援していくことができる。

新しい活動の方向性を探す場合には、上記の工夫とともに、前述の活動プログラムづくりの視点を踏まえた支援が求められよう。

ボランティア団体が法人格を取得しようとする場合、特定非営利活動法人となることが

多い。ボランティア団体には、法人格申請や会計処理等の事務処理面でのノウハウが不十分な団体があり、この部分への支援は重要である。支援機関が自ら法人格取得の支援を行うこともあるが、専門家を紹介したり、既に法人格を取得している団体を紹介したりといった支援方法もある。昨今の公益法人を対象とした法律改正の動きを踏まえ、法税制度に関する最新の情報提供を行うことも支援機関に期待される役割であろう。

2.4 学校と連携して行っているボランティア活動の課題とその対応策

学校と連携して行っているボランティア活動には、ボランティア団体が実施している活動を学校教育に活用する場合、ボランティア団体が学校と美術館等の教育資源との間をコーディネートする場合、放課後や土日にボランティア活動をしたい子どもをボランティア団体が受け入れる場合の3つのタイプがみられた。

しかし、学校とボランティア団体が知り合い、お互いを理解していく過程に時間がかかっている事例が多くみられたことからわかるように、学校側にもボランティア団体側にも両者が連携したボランティア活動へのニーズはあるものの、まだ実践段階に至っていない場合が多いと考えられる。そこで、学校とボランティア団体の間を仲介し、連携のきっかけづくりを行うコーディネート機能が期待され、この役割を支援センターが担っていくことが可能である。

なお、コーディネート機能を果たす場合には、上記の3つのボランティア活動のタイプを踏まえておく必要がある。「子どもの美術教育をサポートする会」や「ほっとはうす」にみられるように、ボランティア団体自らが学校との間のコーディネート機能を有している場合には、支援センターは、この団体のコーディネート機能を側面から支援することが求められよう。例えば、武蔵野市国際交流協会のように、まず教員にボランティア団体の活動を理解してもらい、それを教育資源として認識してもらうために、教員ワークショップを開催する等の意識啓発・研修面での支援が考えられる。

学校とボランティア団体の出会いをコーディネートする場合には、以下の視点を対応例しながら、連携のきっかけづくりや両者間の意向の調整等の支援を行うことが考えられる。

【学校と連携したボランティア活動を行うための課題とその対応策の例】

学校ごとのオーダーメイドな活動プログラムづくり

学校によってボランティア団体を受け入れた経験等に差異があることから、ボランティア団体は学校ごとにきめ細かな対応を行っていた。ボランティア団体の企画や実施している活動内容を一方的に提案するのではなく、学校が指導計画を作成する時期などを考慮し、企画段階から学校と関わってよく相談し、児童・生徒の自主性を尊重しながら、具体的な活動内容を決めていっている。その際には、大人ほど集中できる時間が長くないことや刃物等の道具の取り扱いに慣れている子どもが少ないなどの、子どもの特性に配慮していく

ことも必要であり、このような配慮を行うことについて、支援センターからボランティア団体にアドバイスしていくことができよう。

学校の組織としてのペースやルールを尊重する

学校とボランティア団体の連携の実現のためには、教員の理解を得ることから始まり、学校が組織としての意思決定をする必要がある。ボランティア団体は、このような組織としての意思決定のしくみと要する時間等を理解しておく必要がある。

校長や教頭をはじめ、多くの教員の顔と名前を覚えて、顔の見える関係づくりを行っていくことも重要である。ボランティア活動や地域社会との連携を担当する教員を校務分掌に位置付けている学校もあるので、その教員にコンタクトをとって、協力関係づくりのきっかけにしていくことも考えられる。また、支援センターが教育委員会と協力して、ボランティア団体が校長会等で活動に関する情報提供をするなどの機会を調整し、学校とボランティア団体の連携のきっかけづくりを支援していくことも可能である。

このような方法を活用しながら、ボランティア団体と教員個人の間で芽生えた信頼関係を、ボランティア団体と学校という組織間の信頼関係に発展させていくことが大きなポイントである。組織間の信頼づくりを行うことによって、ボランティア活動に理解のある教員一人ひとりがボランティア団体との連携に向けた動きを円滑に行うことができるようになり、また、校長や担当教員の異動後も連携を継続していける体制づくりが可能となる。

また、地域特性にも配慮が必要である。都市部では、ボランティア団体のメンバーが連携候補先の学校の卒業生である場合は多くなく、学校をボランティア活動の場や子ども達の体験活動の場として位置付けて連携しようとする傾向がみられる。一方、地方部では、メンバーの大半が卒業生であることにより、場合によっては、ボランティア団体の活動が母校への奉仕活動の色彩を帯びることがある。支援センターは、このような人間関係にも配慮して、学校とボランティア団体との信頼関係づくりを進めていくことが求められる。

保護者をはじめ、広く地域に取り組みを知ってもらう

学校と相談しながら外部からの見学者やマスコミを受け入れたり、保護者向けの情報発信を行ったりして、広く地域にボランティア活動の取り組みを知ってもらうような工夫がなされていた。

学校に出向くだけでなく、子ども達にボランティア団体に遊びに来てもらう

子ども達に、放課後や休日にボランティア団体に遊びに来てもらい、団体の活動をより深く知ってもらう工夫がなされていた。子ども達が気軽にボランティア団体に遊びに行くことを通じて、ボランティア活動に関心のある子ども達に活動の場を紹介していくことにもつながっていく。

また、今回の事例では見られなかったが、学校と連携したボランティア活動を行うためには、以下のような工夫をしていくことも有効であると考えられる。

子ども達への教育的な効果があることを学校にアピールし、協働で評価する

学校教育では「学習のねらい」が重要視される。ボランティア活動を学校教育に活用することを学校に提案していくにあたっては、その活動によってどのようなことを身につけさせたいと考えているのか、子ども達にとってどのような効果があるのかを示すことで、学校側の理解が得やすくなり連携が円滑に進む。また、活動によって実際にどのような成果を得られたのかについて、ボランティア団体と教員が協働で活動を振り返って評価をし、その後の活動に活かしていくことも重要である。

子ども達の自発性を促す支援を行う

平成 17 年度から全教室にパソコンが設置される予定であり、学校の許可を得た上で、ボランティア団体の活動を子ども達に紹介するようなメールを送るなど、頻度の高い働きかけを行って、子ども達が活動に参加する意欲を引き出すような工夫も考えられる。

ボランティア活動に関心があっても、何をすればよいのか漠然としている子どもも多い。ボランティア活動をしたい子どもをボランティア団体が受け入れる際には、何がやりたいのか、何ができるのかを、子ども自身が考えるきっかけとなるような資料を提供したり、アンケートを実施したりするなど、事前に参加意識を明確にするような工夫が必要である。

学校も活動場所として活用できるひとつの社会資源と捉える

少子化に伴い学級数が減少している今日、余裕教室が生じている学校がある。ボランティア団体にとって活動拠点や活動場所の確保が大きな課題であるなかで、地域の住民が集まりやすい学校という施設は重要な社会資源である。ボランティア団体が余裕教室を活用したい場合には、放課後や土日に活動をしたい子どもをボランティア団体が受け入れるなど、学校に受け入れのメリットを提示しながら協力を呼びかけていくことがポイントである。

学校のなかに、ボランティア活動や体験活動に関する窓口機能をつくってもらうよう提案する

夏休み前等の一時期に、子ども達からボランティア活動についての問い合わせが集中することがあり、ボランティアコーディネイトを行う団体や受け入れを行うボランティア団体に対応に苦慮することがある。このような状況を回避するためには、支援センターが教育委員会と連携し、学校に、子ども達の要望等を取りまとめる担当者を決めるなどの窓口機能の設置を呼びかけたり、学校内部で事前に情報の整理をしてもらう体制づくりを提案することなどが考えられる。前述の「子ども達の自発性を促す支援を行う」視点に沿って、子ども達自身が何をしたいのかをある程度明確にした上で、ボランティアコーディネイトを行う団体やボランティア団体に受け入れの依頼をすることによって、子ども達が各々にふさわしい活動を見つけることができ、ボランティア活動の体験学習が深まっていく。